
強さ（ポーボボのファンフィクション）

y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強さ（ポーボボのファンフィクション）

【Nコード】

N0734G

【作者名】

y

【あらすじ】

敵の本拠地に乗り込む前夜、ホテルで休息を取っていた一行に、ポコミが提案する。「ビュティおねえちゃんは足手まといだから置いていこう」と・・・

衝突（前書き）

集英社「ボボボーボ・ボーボボ」のファンフィクションです。各関係者様・団体とは無関係です

衝突

「嘘じゃないよ！今だって私達はへっくんに頼まれてポコミちゃんを助けに来たんだよ！」

あ ウソじゃない

何故か分からないけれど、背後から掛けられた高い澄んだ声に直感でそう思った
声の方角を振り向くと、戦いの場には全くそぐわない女の子がヒトリ立っていた

私より4、5才上位の女の子

珍しい、桜色の綺麗な髪

大きな瞳、碧い瞳

戦士にはありえない白い肌

全く鍛えていない、華奢な体

場違いな程、脆くて柔らかそうな、女の子

大きな瞳に涙を浮かべて、両手を胸の前にあてて、私をじっと見ている

信じて 私達は あなたの 味方

大きな瞳は潤んで、そう哀しい位に訴えてた

「……ホント？」

自然と言葉が口から出た。何の疑いようも無いその声に、瞳に

「うん」

そう言つてあなたは笑つた。本当ににっこりと。私を油断させる為でもなく、何の作為も無く

ねえ、あなた今までの私を見てなかったの？

今までの戦いを見ていなかったの？

別にあなたを攻撃してもつまんないと思つたから、私はあなたに何もしなかつただけで

あなたの仲間をボコボコにした私を見てたでしょ？

なんなの？この哀しい位に、無防備なおねえちゃんは

「ボーボボ、ビュティおねえちゃんはこの街に置いて行こう」

帝国23区要塞に明日は侵入するという前夜、ボーボボ達は、そこからそんなに遠くない大きな街に宿を取つた。バイキングで食事を済まして、明日の予定を話し合おうとロビーのソファに座つた。そして私はトコトコと近づいて、その声を掛けたんだ

「え・・・ポコミちゃん？」

おねえちゃん、いやなこと言うけどごめん。でもそれが一番いいんだよ。ボーボボの隣になんて座つてないでさ、お部屋に行つて欲しい。ずっとその機会をうかがっていたのに、ボーボボがおねえちゃんを離さないから悪いんだよ？

「なんだと？ポコミ」

さっきまでふざけてパツチンを食べてたボーボボの声がすつごく低くなつた。分かつてるよ。そんなこと許さねえつて言うんでしょ。

でもさー

「テーマバカかチビガキ！ビュティがいねかつたら、どいつがツッコミすりゃいいんだよ？」

「私がツッコんであげるよ。戦闘中でも私は大丈夫だし、守つて貰

う必要ないから」

おねえちゃんの大きな瞳がもつと大きく見開かれた。ああ、だからやだったのに

「あのなあ、お前はまだ仲間になって日が浅いから、ビュティのツッコミがどんだけー」

「プルルン、それってさ、おねえちゃんの身の安全よりも大切なもの？」

みんなが固まったのが分かった。プルルンは氷みたいに固まったからもつと分かった

「エリートアカデミーのコースターに飛び移る時ー！ポーボボもパッチンもプルルンもみーんなふざけてて、おねえちゃんを助けたのはポコミだよ。ナメっちの衝撃波がおねえちゃんを襲った時もそうでしょ？」

ねえポーボボさあ、空気読んでよ。おねえちゃんを部屋に戻してよ。ポーボボの言うことならおねえちゃんは絶対聞くよ。だから

「・・・ポコミ、だがー！俺達にはビュティの・・・いや、ビュティの存在がー」

「分かっているよ。おねえちゃんが皆の連携にすつごく大事な存在だつてことはさ。単独の戦力が三倍じゃなくて三乗になるもんね。今までそれで敵を倒して来たんでしょ？資料で読んだよ。でもさあ、明日はー！明日からは帝国の中枢に侵入するんだよ。勿論ポコミだつて皆だつておねえちゃんを守ると思うけど・・・守りきれなかったら・・・どうするの？自分で自分の身を守れないおねえちゃんは一休どうなるの？」

「お、俺達が負ける訳ねえだろーが！」

いつもよりちよつと元気の無いパッチンの声

「おい、ガキ。嬢ちゃんは大丈夫だ。ずっとこれまでもついて来たんだしよ」

パッチンの子分の男のヒト。えーと名前はなんだっけ・・・デコリン星のヒトだっけ？あなたなんて一番おねえちゃんのこと守ってな

いじゃん

「皆やめてよ……」、「ごめんねポコミちゃん。皆、ポコミちゃん
は私のコト心配してくれて言ってくれてるんだよ……」

おねえちゃんが、険悪なムードを察して泣きそうな小さな声を出し
た。パツチンも皆おねえちゃんを見る。泣くなよ、って表情で。ポ
ーボボはまだ何も言わない。サングラスなんて掛けてるから表情が
読めない。決定権はポーボボなんだから、早く何か言葉を言っ
てよ。そっちから仕掛けてくれなきゃ、会話を有利に進められないよ

「ポコミちゃん……私……足手まといなんだね」

おねえちゃん、もう私のことなんて庇わなくていいからね。これか
らもつとイヤなこと言うから……ごめん

「うん」

皆が気でも違ったのか、っていう驚いた表情で私を見る

「おねえちゃんは確かに連携にすっごく役立つけど、全く戦力にな
らないんだよ。それに皆おねえちゃんを庇おうとするから、それで
戦力が削られちゃうし、もしおねえちゃんが人質にでも取られたら、
皆は全く動けなくなっちゃうんだ。だから……」

「黙れポコミ」

ポーボボが始めて声を出した。わあ怒ってるね、静かな声でも分か
るよ……あれ？なにおねえちゃんの肩に手なんてあててんの？お
ねえちゃんはポコミと違って大人の女の人の人なんだからヘンじゃない
？……おねえちゃんもう泣いちゃうかな……

「この街はとつても大きいし、自警団もすっごく強いって噂だよ。

まだ帝国に抵抗してる。そんな簡単には攻め込まれないだろうから、
このホテルでもいいからおねえちゃんをここに」

「黙れって言ったのが聞こえなかったのか」

はい、ごめんね。黙るよ。もうおねえちゃん泣いちゃったもんね
「ビュティ、部屋に行け」

そうそう、それでいいの。ほらパツチン連れて行ってよ。私おねえ
ちゃんの泣き顔あまり見たくないよ

「・・・ポーボボ・・・私は・・・」

「大丈夫だ。何も心配すんな。明日は早えから、早く寝るよ」

パツチンがポーボボを見上げて泣いてるおねえちゃんの手をぐいぐい引つ張って、連れて行つた。おねえちゃんは何度も何度もこつちを見て立ち止まってたけど、ポーボボが「風呂入れよー」ってすつごい優しい声で声を掛けたら、本当にゆつくり廊下の奥に消えていった

「どついつつもりだ」

ぎゃあぎゃあ喚いてたコアラさんはおねえちゃんの名前を叫んで走って行つたし、デコリン星の人はパツチンについて行つて、プルルンは「部屋の布団ひいとくわ」って言つてどっか行つちやつたからロビーにはポコミとポーボボだけ。そうだねプルルンには決定権ないし、ポーボボに任せた、って意味なんだろうな。ソファに座つて手を組んでるポーボボの前に私は立った。さっきまで食事の帰りにぎわっていたロビーは、今はもう殆ど人はいなかった

「どついつつもりって・・・ポコミの言つたコト、間違つてんの？」
怒ってる怒ってる。そーだよ。ポーボボはおねえちゃんのコト大好きだもんね。知ってるよ。お兄ちゃんの手紙読んでれば大体分かつてたし、実際見たらもつと分かつたもん。でもさ少し年離れすぎでんじゃん？

「ポコミはポーボボ達の今までの戦いの資料も全部頭に入ってるし、現在の戦力もよく分かつてるよ。おねえちゃんは足手まといだよ。つていうか、ポコミじゃなくなつて、おねえちゃんがもの凄く妙な存在つてコト位分かるよ。戦いの旅に出ているパーティの中に、全く闘えない存在が居るなんてありえない。治癒能力や全体への防御能力があるなら分かるけど。融合だつて出来ないんでしょ？しかも戦闘員全てがおねえちゃんを庇おうとしているなんて、非合理的で仕方ないよ。誰か一人に護衛させるとか、おねえちゃんに護身を教えるとか、刃物を教えるとかそういうコト、結構長く一緒に居たく

せに全く考えなかつたの？甘やかしすぎだよ」

ポーボボは、こっちを見ていているような感じだけど、サングラスの中の瞳は読めない。ちえっ。アレは便利だなあ

「これからは、今までの戦いなんかよりもっと厳しい戦いになるよ。ポーボボだつておねえちゃんに危ない目にあつて欲しくなんてないんでしょ？ポコミだつてそうだよ。おねえちゃんすつごくポコミに優しくしてくれたし……。知ってるよ。おねえちゃんみたいな、綺麗な髪を持つてて、綺麗な女の人が捕まったらどうなるかって。少しかだけ見たよーいだから、おねえちゃんはここに置いて行こう」
ポーボボの肩が上がつたのが感じられた。ポーボボ……ちよつとヤバイかな。暴れられたら面倒臭いな。すぐドレスチェンジ出来る用意だけはしておこうつと

「……お前が見た目通りのガキじゃねえことは、名古屋で戦っているからよく分かつてる」

何をガマンしてるのかな？静かだけど、苛々してる

「お前の言っていることは全くの正論だ。全く恐れ入る。天才だ。アニキなんかよりよっぽど強エな。俺たちなんかよりずっと冷静に戦力を分析してやがるな」

ありがとうーで？

「一つだけ聞く。お前ビュティのことどう思う？」

んん？なに？ヘンな切り替えしが来たなあ。私をゆさぶろうと思つているのかな

「すつごく優しくして、とつてもキレイなおねえちゃん」

実際そう思うよ。あんなにキレイなら同姓には嫌われそうだけど、おねえちゃんはそれはないだろうね。皆に好かれる女のヒト。ポコミも好きだよ。珍しいよあんな優しいヒト。だからこそケガさせたくないし、戦いを有利にするためには、離れて貰つたほうがいいしーい目的を達成して、早く迎えに来てあげればいいんじゃない

「そんだけか？」

んん何をしよつとしてるのかなあ？ポーボボの目的はおねえちゃん

を今まで通り連れて行くことだから、私から「うんそうだねやっぱ一緒のがいいね」って言わせることだよ。そうすると――

「――ポコミ、お前今まで、単独で戦って来たことしかねえか？は？そうだけど。ナメっちは別にクラスメイトだし、っていうか何なの？なんでポコミが質問されてるんだろう。会話術は自分がリードを取らなきゃ。相手に考えさせて悩ませなきゃいけないんだから、ポーボボに質問されてちゃダメだ

「そうだけど・・・そんな関係ないじゃん、今は」

ポーボボは普段ふざけてるけど、知能は高いと思う。心理戦のような戦いも資料を見る限りある

「大アリだ」

――ダメだ。間髪入れずに返された。完全に主導権を握られちゃった。ちえっ――おひらきにしないと私が言いくるめられちゃうな

「一晩考えてね。もう遅い時間だし、ポコミ眠くなっちゃたよ」

こんな時、私の外見と年齢はとっても便利。私は向きを変えて、廊下に歩き出した。

煩悶

「お前ならば問題あるまい。さあポーボボを殺しに行くでちゅ。ポ
コミ」

「はい、バブウ様」

培養液から出てーバブウ様の研究所で、私は椅子に座った

「これがポーボボの資料でちゅ。培養液の中である程度のデータは
入力しておきましたが、もう一度目を通しなちゅい。お前の兄を洗
脳して、悪い道に導いている悪い男でちゅ。エリートアカデミー創
立以来の天才、ポコミ。期待していまちゅよ」

「アハ 楽しみ。ポーボボってそんなに強いんですか？バブウ様。
強いヒトと戦うのポコミ大好きです」

お兄ちゃんは別にいいや。たまに手紙が来るくらいだし、そんなに
会ってないし、お兄ちゃんはお兄ちゃんだもん

「改造を施して、更に頼もしくなりまちなねポコミ。将来は帝国の
重役につける實力をお前は持っておりまちゅよ。全く私も鼻が高い
でちゅ」

はあどうも。別にどうでもいいけどさ。ポコミは強くなりたいただけ
だし。アカデミーで改造手術の志願者を募った時も何で皆志願しな
かったんだろ。強くなれるんなら別に精神に影響があるうがなんだ
っていいじゃん。お兄ちゃんも、善滅丸飲んだくらいで自我が壊れ
るなんてなっさけないなあ。そんな脆い精神なら強くなるうなんて
思わなきゃいいのに。みんなヘンなの

「あれ？バブウ様。この女の子なんですか？なんで能力欄が空白な
んですか？」

資料を見ていた私は疑問に思った。ポーボボ、首領パッチ、ところ
天の助・・・色んなヒトの写真と能力や性格などの欄には色んな記
載があるのにー桜色のキレイな女の子の写真の下には何の記載
もない。年齢と身体データだけ

「その小娘は真拳使いではありません。何の力もない、非戦闘員でちゅ」

「なんでそんな子が敵なの？」

「取るに足らない小娘でちゅ」

ならこの子を先に片付ければ？一応攻撃目標なんですよ？簡単じゃん

「ただ……三世様は、その小娘を人質に取ったり、攻撃するなど仰っております」

つてことはポーボボの彼女かなんか？それなら人質にするには有効かもだけど、もっと強くなっちゃうつてこと？

「ポーボボの今までの戦績でも、その小娘を人質にした敵は殆どいません」

何でだろう？確かにすっごくキレイで優しそうなおねえちゃんだけど……お兄ちゃんの手紙に書いてあった名前だね、ビュティつて。優しくて皆を心配するすごくいい子つて書いてあったかな？まあお兄ちゃん好みの女の子だね。よく分かんないなあ……

「分かりましたバブウ様。このおねえちゃんを攻撃してもつまんなそうだし、ポーボボに的を絞って倒してお見せします。えーと名古屋兄弟は助けなくていいんですよ？面倒だし」

「お前の好きになっちゃい。期待しておりますまちゅよポコミ。この任務を成功させたら、お前は蒼の尖鋭兵団に入団を認めましょう。お前の年齢でこれは異例のことです」

はあ、別にどうでもいいですけど……何か手術を受ける前より戦い以外のコトがどうでもよくなっちゃったなあ……改造手術つて、精神に影響つて、こういうモノなのかな？……でもいいや好都合じゃん。ポコミは強くなりたいだけだもん。それだけだもん。今のポコミならナメっちより強いかな？

誰よりも、強くなりたいな……

「・・・おねえちゃん？」

ボーボボ達は和風の大部屋、おねえちゃんとポコミは女の子だから洋風の二人部屋。扉を開けて、部屋の中を見回したけど、おねえちゃんもパツチンも他のヒトも誰もいない

「・・・お風呂かなあ？」

耳を凝らしたら、部屋の奥のバスルームから水音が聞こえた。ボーボボにお風呂入れって言われたから素直に入ってるのかな

「おーねえちゃん！」

「きやあつ！ポコミちゃん？！」

脱衣所からお風呂への扉をばっ、て開けたらおねえちゃんがバスチェアに座ってた。驚いて私を振り向いた。ただシャワーが出てるだけで、そのほっそい体の何処にも泡はついてなかったー泣いてたんだね

「ポコミもオフロ入る！」

私は服を脱いで、ざぶん、ってお湯が入ってた湯船に入った。おねえちゃんはびっくりしてたけど、何度かシャワーで顔を洗うようにしてから、私を見てにつこり笑った。いいよ、隠さなくても。目真つ赤だよ

「ポコミちゃん、髪飾り取るの忘れてるよ」

おねえちゃんは私の髪飾りを取ってくれた。いいのに無理して笑わなくても。もしおねえちゃんがヤだったら、ポコミは子供だし、大部屋に行くよ？ポコミのコト、イヤでしょ？ボーボボから離そうとしてるんだから。今までずっと庇われて、誰にも足手まといなんて言われたコトなかったんでしょ？シヨツクだったんでしょ？

「髪の毛洗ってあげるから、湯船から出て」

なんでそんなにこにこしてんの？そんなバカじゃないでしょおねえちゃん。私に怒ってもいいのに

「シャンプー沁みたら、言ってね」

おねえちゃんは私をバスチェアに座らせて、その背後から私の長

い髪にシャンプーを掛けた。こしこし、優しい手つきで洗ってくれる。ほっそい指の感触。あれ？私なんで他人に背後なんて取らせてるの？もしかしたらおねえちゃんは弱いフリをしてるだけで、ホントは強いかもよ？自分以外信じちゃダメだ。今からポーボ達を殺して、私は帝国に寝返るコトだつて幾らでもできるんだよ？——つてしないけどさ。不利な方についてる方が戦いは楽しいもんね
「シャワーかけるよ？」

なんか気持ちいいなあ。髪の毛を誰かに洗ってもらうなんてすっごく小さい頃ママにしてもらったくらいかな？——おねえちゃんはいいか。うん。おねえちゃんならいいや

「おねえちゃん！ポコミ背中洗ってあげるよ！」
私は——なんだろう、穏やかな気持ちだった。おねえちゃんは誰にも警戒心を与えないのが魅力なのは分かってる。短期間だけ一緒にいてそれは分かった。だからポーボたちはおねえちゃんを傍に置いてる。まともな精神の人間は、戦いの緊張の連続では疲労が溜まる。その時女性やキレイなものに息抜きを求め、って勉強したもん。ポコミは手術してそんなのは除去した筈なのに、少しそういうのが残っているのかな？まあいいや

「ありがと」
おねえちゃんの背後に回って、こしこし洗う。白い背中。何の筋肉もついてない。腕も、首も、腰も、足も——桜色の髪が背中に濡れて張り付いて、真っ白と桜色が光ってるみたい——この髪の毛が狩られたら——イヤだなあ・・・人間、特に女のヒトは髪の毛を刈られるなんて、すっごく屈辱的なコトだもん

「あはは、ポコミちゃん！どこ触ってるの？くすぐりたいよ」
ついおねえちゃんの首筋に貼りついた髪の毛を撫でていた私におねえちゃんが笑う——ああ、イヤだな。こんなキレイなもの、刈られたくない、汚されたくない、壊されたくない
「ビュティおねえちゃんのお肌キレイだね」

なに言ってるの？っておねえちゃんは笑う。無理してんじゃなくて、

ただ私を信頼して背後を任せて、笑う。私はあなたの首なんて簡単に折れるんだよ？ポーボボにだって力負けしなかったんだから

「・・・おねえちゃんごめんね」

一応、謝っておこうーあんまりおねえちゃんに嫌われたくないや
「・・・ポコミちゃん」

おねえちゃんは笑うのを止めて、私を振り返った。濡れてる髪が貼り付いてる、きれいな顔。おねえちゃんってホントキレイで優しい顔してるね

「ポコミちゃんは私の安全を考えてああ言ってくれたんでしょ？私もそう思うよ。今まで皆に甘えていたもの私。武器を持って、ポーボボ達に護身術だけでも教わろうと思った時あつただけど、ポーボボ達がそんなことする必要ないってずっと言うの。私のコトは絶対守るから、そのままでもいい、っていつも言うから・・・それに甘えて、私ーポコミちゃんの言ってくれたことは逆に嬉しかった。いい機会だもの。私このホテルに残るね」

「ーうん。それが、いいよ。おねえちゃんがそう願うならポーボボ達も渋々だろうけど承諾すると思うよ

「でもずっと祈っているから。皆がケガしないように、嫌な思いをしないように・・・ずっと待っているから」

「ーなんだろ？何かイライラしてきた。何この感情？私の思い通りになってるんじゃない。何で私イライラしてるの？」

「気をつけてね。皆のこと宜しくね・・・」

やさしいビュティおねえちゃん。私が守ってあげるから

「ポコミちゃんも、余りムリしないで・・・」

そんな声出さないでー泣かないで

「・・・ごめん、ね・・・」

泣かしてるのはポコミ。罪悪感

こんな感情、どこに残っていたんだろう

「俺と一緒に帝国へ来い、ポコミ」

ちよつとー！ナメつち。おねえちゃんは関係ないし非戦闘員じゃんか！恨みはないなら攻撃しないでよ！もう！

「お前は特別だ」

特別？あつそう・・・ナメつち強くなってるね。でもソレ自分の力じゃないじゃん。つまんない

「最高の位をくれてやる」

いんない。権力ずくの力なんて何の意味もない。自分が強くなんなきゃ意味がないでしょ。ナメつちホントつまんなくなっちゃったね

「ポコミちゃん！」

わ？おねえちゃん早くポーボボの所に行つて！つてか何でポーボボ達こつち来ないのー！さつさと回復しておねえちゃん守つてよ！使えないなあ！

「・・・」

おねえちゃん、そんな目でポコミのこと見ないでよ。大丈夫だよ、行くわけないでしょ？あんな詰まんないトコ

ー！つてぜんぜん私のコト疑つてないね。ポコミは元は敵だったんだから、幾らあなたを庇ったからつて、何でそんなに信頼してるのかなあ・・・キレイな瞳

「行かない。お兄ちゃんや私のことを散々利用して捨てた帝国を私は許さない」

あーもう・・・なんでそんな嬉しそうにポコミを見るの？適当に言っただけなのにさ

「それに皆のこと好きだし、裏切りたくないから」

おねえちゃんの嬉しそうな顔もつと見たくて、言ってみた。あ、喜んでる。頬が赤くなって、碧い瞳が潤んでる
なんか嬉しいな

嬉しい

信頼されてる。おねえちゃんも傷つけさせたくない。おねえちゃんが傷ついたら、きっと私はものすごくイヤな気分になる

この嬉しそうな顔が見れなくなるなんてイヤだ。絶対ヤダ

ポコミをイヤな気分させるなら、親友のナメっちでもポコミは絶対に許さないよ

私がイヤな気分にならない為にーおねえちゃんを傷つけないようにする為なら、負ける訳にはいかないよ

負けるもんか

絶対に

太陽

「きゃあポコミちゃん！」

「爪？ポコミー！」

おねえちゃん、こつち来ちゃだめ。ジヨブス先生と一緒にいる強化人間の爪が狙ってる。ポコミにはこんなの全然効かないから、ってポーポポ！おねえちゃんを、ちゃんと後ろに置いときなつてばもう！

「・・・しつかり・・・」
そんな心配しないでよ、ホント平気なんだつてば。そんな泣きそうな表情でポコミを見ないでつてば。そんな顔されると、ポコミはまたイヤな気分になっちゃうんだ。

ポコミは自分がイヤなコトが一番なの

別におねえちゃんを心配してるんじゃないわなくて・・・

「ん・・・」

おねえちゃんの甘い吐息が頬にあたった。いい匂い。少しだけ覚えているーママみたいなの

私はお風呂から出て、おねえちゃんと一緒のベッドに寝た。おねえちゃんは私を抱きかかえるようにして、パジャマを着て眠ってるー何時かな？

「・・・」

ふと、扉の向こうに気配を感じた。現在時刻は午前二時半

「ゆっくり寝ててね。おねえちゃん」

おねえちゃんの顔が見れるのもこれで最後かもしれないかなー
私はおねえちゃんを起こさないようにベッドから出て、毛布を掛け
てあげて、静かに扉に向かった

「……もう眠くねえか、お嬢ちゃん」

ボーボボは私をホテルの外のガーデンに連れて行った。小さなイス
とテーブルがある。空は星空でとってもキレイで静か。私は促され
るまま、イスに座った。ボーボボも座った

「うん。おねえちゃんが寝かせてくれたからもう平気。一緒にお風
呂に入ったよ」

羨ましいんじゃない？ボーボボ。ボーボボもおねえちゃんとオフロ
入りたいんじゃない？なんだか妙な優越感に浸って私はボーボボの
顔を覗き込んだ。サングラスはやっぱり邪魔だけど、さつきよりは
表情が読みやすい。なんでかってボーボボの眉は上がった、眉間に
はたくさん皺。ボーボボの表情は眉でしか読めないもの

「そうかーじゃあ、さっきの話の続きだ。まず他の仲間全員の
総意だ。ビュティは連れて行く」

ほーら来た。分かってたけど。さあ、私をどうやって説得するの？
それとも私を外す？戦力的にはかなり痛手だけど、おねえちゃんを
外すよりはいいってコトかな？ーまあそうなっても私は帝国に侵
入するけどね。おねえちゃんを守ってあげようつと

「ビュティがいれば、いてくれればー俺たちは絶対に負けねえ。
負ける訳にはいかねえからな」
ん？

「ビュティがもしーありえねえが、捕まって嫌な目に合うー
ーなんざ思っただけで俺等はものすっげえ気分が悪くなるからな。
その感情がある。だからぜってーに負けねえ」

あれれ？ポコミとおんなじ？かな？皆自分がイヤな気分になりたく
ないから？

「お前が何度かビュティを救ってくれたのには、マジで感謝している。礼を言う。だがーその傍に他のヤツラがいただろ？常にビュティの傍には誰かがいるだろ？護衛役を決める必要なんてねえんだ。俺等は全てあいつを守る為に戦っているって言っても、ある意味間違いじゃねえんだ。お前が救ってくれなかったとしても、最後の最後じゃ絶対に誰かがあいつを守る。俺等は皆それを分かっているから、護衛役なんて決めねえんだよ」

ポコミが余計なことしてっていうつもり？ゴーマンだなあ

「だから俺等はーあいつに守らせてもらってる。あいつが自分で自分の身を守るようになってなったらー」
なったら？

「俺等、今より弱くなっちまうんだぜ」

愕然とした

そんな強さを考えたコトなんてなかった

「守る存在がいてくれるからこそ、負けられねえ、って感情はー
ーまだガキのお前には分からねえか？」

ガキ？あつそう。ふーんだ。ガキはどっち？いつてもふざけておねえちゃんに怒られてるクセに

「俺も昔はそうだったぜ。一人で戦ってた時はな。テメエより強い敵なら、状況判断しっかりしなきゃ殺されて終わりだ。だがな、ビュティと一緒にいるんじやそういうワケにいかねえ。テメエより強かるうがなんだろうが、とにかくあいつを逃がさなきゃいけねえ、逃がしても捕まっちゃうかもしんねえ、なら目の前の敵ブツ倒さなきゃいけねえ、って考えりゃ、想像以上の力が出るもんだ。それで何度勝ってきたか分かんねえよ」

そう、か。そういう強さもあるんだね。だからビュティおねえちゃんを強くしなかったの？

「ビュティはなんでもかんでも信じちまう。昨日まで敵だったヤツ

だろうが、一旦信頼したら、100%信じて仲間と認めちまうー
ー正直、ビュティとお前を同じ部屋にすんのは抵抗があったが、お
前、ビュティに手エ出せねえだろ」
確かにね。おねえちゃんを攫って、人質にして、帝国に行くかも、
って疑われるのは当たり前だね。でも確かに手出せないや。あんな
哀しい位に優しい女のヒト。ポコミを完全に信頼して、もし裏切
ってもきつとずっと信じているような瞳をしているヒト
「今まで単独で戦ってきたみてえだがービュティと一緒に居て、
お前少しは分かってんじゃねえか？」

うん

ホントはもう 分かってる

きつとポコミも強くなってる

アカデミーにいた頃よりも

ポーボボと名古屋で戦った時よりも

今の方が

ずっと ずっとー

守らせてくれる、信頼してくれるヒトがいるから

強くなれる

「分かったよポーボボ」

ポーボボのサングラスの奥を見て、私はそう言った

「降参。おねえちゃんは連れて行こう。そのが、戦力的にも、戦
略的にも有利だね」

ポーボボの眉間の皺がすっ、て消えた

「分かってくれたか」

「ただし、あんまりふざけてばかりいないで、ポコミが飛び出す前におねえちゃんを、ちゃんと気にしてよね？いい加減にしてくれないと、ポコミ、フオローしきれないからね？」

ポーボボが笑った。悪イ悪イって、うるさい位に笑った。だからそれがダメなんだって。おねえちゃんが起きてきたらどうすんの

「明日からは大変だぜ。宜しくな、ポコミ」

ポーボボが手を差し出してきた。大きな手。ごつごつしてて、長い指。しっかりしてね。おねえちゃんはあるあなたのこと一番信頼してんだよ

「うん」

「おっはよー おねえちゃん！早く起きてよ！もう皆食堂で待つてるよ！」

ベッドの上にダイブして、おねえちゃんを起こした。窓から差し込む朝日。旅立ちには相応しいキレイな晴天

「食べたらずく行くってさ！皆おねえちゃんが来るまで食べないってガマンして、おなか空いて険悪ムードになっちゃってるよ！パツチンなんてドリンクバーの中に入っちゃって暴れてるよ！早く行って止めなきゃ！おねえちゃんしか止めれないよ！」

ベッドに半身を起こして、寝惚けてるみたいなおねえちゃん。目の周りはまだ赤いけど、私の言葉は聞こえてるみたい。私の言葉の意味は分かっているみたい

「・・・ポコミちゃん・・・私・・・いいの？」

「何言ってるの？おねえちゃんがいなきゃ誰があのハジケおにいさん達を止めれるっていうの？」

おねえちゃんの表情。ゆっくりと、本当にゆっくりと、不安そうな表情からー

「ビュティおねえちゃんがいなきゃ、みんなダメだってさ」

晴天の空に浮かぶ太陽のような、満面の笑顔

どきっとした

「もう！首領パッチ君は！あんなに何度もホテルの人に迷惑かけちゃダメって言うてるのに！」

おねえちゃんはそう言って、急いで着替えを始めた。顔を洗って、髪を梳かして、扉に向かってー私を振り向いた

「ありがとう、ポコミちゃん」

へっポコお兄ちゃんの恋は前途多難だね

新たなライバル、一人増えちゃったよ

太陽（後書き）

読んで下さってありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0734g/>

強さ（ポーボボのファンフィクション）

2010年10月8日22時13分発行